

日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2023.09.30

NO.39

- 理事長より「第35回日本学校教育相談学会総会・研究大会（新潟大会）に参加して」理事長：柴 一彌
- 精神医学特別講座「起立性調節障害～医療から見た不登校～」講師：菅間記念病院 小児科科長 八木 正樹 氏
- 第14回とちぎ教育相談カフェ「子どもたちの自己肯定感を高めるあれこれ」話題提供：築瀬のり子 氏
- 特集「第35回日本学校教育相談学会第総会・研究大会（新潟大会）」レポート
- 第24回夏季ワークショップ」レポート
- 第41回支部研究発表会 コメンテーター：藤浪 直紀 氏
- 栃木県支部事務局からのお知らせ

○ 「第35回日本学校教育相談学会総会・研究大会（新潟大会）に参加して」 柴 一彌

大会の記念講演で印象に残った言葉、それは「愛語」という言葉です。

第35回新潟大会記念講演「良寛さんと手毬」の講師、全国良寛会会長小島正芳さんは「愛語」こそが良寛の生き方そのものと述べていました。この言葉は良寛が帰依する曹洞宗始祖道元和尚が説いた『正法眼蔵』にあるとおっしゃっています。

この言葉の意味することは次のとおりです。「慈悲の心を持つとか、やさしい、愛するとか、そういう言葉だけを使い、乱暴な言葉、憎む言葉を使わないことが菩薩に至る道だ」という考え（松下政経塾生 橋秀徳氏「論考」）より。

さらに良寛は「良寛禅師戒語」に

- ① 人のいうことを聞かずにものを言う
- ② ことごとしくものを言う
- ③ 人の器量のある無しを言う

など九十箇条に及ぶ厳しい戒めの記述を遺しました。

「修行である托鉢を忘れ、出くわした村の童子たちと毬つきをしてついつい日が暮れてしまった」とか、「泥棒に入られても何もやるものがないから自分の寝ていたせんべい布団をやった」とか、その子供好きで素朴で心温まるエピソードがよく語られる良寛には、実は上記のように「自分は何者か」を問い続けてきた「厳しい人間観」に裏打ちされていたという本質があるのです。（一部橋氏の論考より）

新潟大会参加後、私は没後90周年を迎えた宮沢賢治の聖地、岩手県花巻市にある「宮沢賢治記念館」を訪ねる機会がありました。そこで改めて感じたことは「良寛」の精神と実践が全く重なる賢治の生き方でした。二人に共通することは「柔軟でかつ信念を曲げない」「まっすぐな求道者」そのものだということです。まれにみる酷暑のこの夏、時代を超えた聖人の深遠な心に触れ、きりりと身の引き締まる思いに駆られた二つの経験でした。

第35回新潟大会はオンラインで（8月5日～7日）盛況に開催され、全日程をつつがなく実施することができました。（私は長岡市内宿泊先からオンライン参加）

昨年度の栃木大会には新潟県支部から渡辺支部長を始め実行委員4人の訪問を受け、エールと元気をいただいたのは記憶に新しいところです。

私は慣例に従い、大会前日5日の「支部代表者会議」と大会当日6日の「全国総会」の議長の任をつかさどることになり、本部事務局のサポートもあり無事その責務を果たすことができました。参加していただいたたくさんのお本県支部の会員の皆様にも感謝申し上げます。

総会、その後の全国理事会、全国支部事務局長会議では「会員減をストップさせるための知恵と工夫を本気で練り上げよう」と春日井会長を先頭にして動き出しました。今までにもまして教育相談の在り方が重要視されている今、栃木県支部も皆さんの声を大きな力にして一緒に行動していきましょう。



（宮沢賢治記念館入り口）

○ 令和5年度栃木県支部総会報告

令和5年6月3日、教育会館大ホールにて、令和5年度の支部総会が開催されました。佐藤理事の議事進行により、令和4年度事業報告・決算報告、令和5年度の事業計画・予算案などが滞りなく可決されました。詳細は、支部からの送付物の関係資料をご確認ください。今年度は役員改選の年となりますが、新理事に伊澤 孝さん、監事に井野惟子さん、倉島郁乃さんが決まりました。

○ 6/3 精神医学特別講座「起立性調節障害」——医療から見た不登校——

講師：社会医療法人博愛会菅間記念病院小児科科長 八木 正樹 氏

まず、八木先生のお人柄について一言述べたい。子どもたちの病に非常に真摯に立ち向かっていて、教師に対しても保護者に対してもとても謙虚に対応してくださるという印象を受けました。

最初に先生は、「起立性調節障害」について、誤解の多いことを取り上げています。

心の病気ではない、なまけ病でもない、気持ちが弱いからでもない、不登校の子につく病名ではない、どれも誤解であると言います。

1 起立性調節障害の特徴は

- ① 起立時にめまい・頭痛・失神を起こす。
- ② 腹痛・下痢・乗り物酔い・疲労感など多様な症状を訴える。
- ③ 朝起きるのが苦手。
- ④ 休日は元気。

2 主な原因→①・②自律神経がうまく働いていない。③体内時計が狂っている。体内時計＝生活時間→生活リズム…朝と感じて起きようとする時間と夜眠くなって寝る時間が大幅にずれてしまう。④休日は元気→心身相関…心と身体は互いに影響し合う。学校はストレスの宝庫。起立性調節障害の症状が強く出やすい。

要因（リスク因子）

内的要因…二次性徴・性ホルモン・性格（過剰適応型、頑固こだわり型）・発達特性（自閉症スペクトラム障害3～5人に1人、発症リスク高い）

◎運動不足の影響は計り知れない。

3 起立性調節障害の診断

問診・診察・検査（血液・尿・MRI・心電図・心エコー・脳波・新起立検査）

筆者注…これだけの検査を経なければ診断はできないということなので、留意すべきことだと思う。

4 起立性調節障害の治療…（ここでは生活指導のみ記載）

- ① 朝、日光を浴びる（午前中の早い時間に）
- ② 朝ご飯を食べる。
- ③ 運動する…散歩、水泳、段階的に有酸素運動へと。
- ④ 塩分と水分を摂るのも有効（起立性調節障害の患者さんは塩分と水分が足りていないことが多い）

（文責：佐藤 幹雄）

○ 6/10 第14回とちぎ教育相談カフェ

「子どもたちの自己肯定感を高めるあれこれ」話題提供：学会SV 築瀬のり子 氏

第14回とちぎ教育相談カフェが、令和5年6月10日（土）の午後、築瀬のり子氏を話題提供者として「子どもたちの自己肯定感を高めるあれこれ」というテーマで行われました。自己肯定感を高めることは、自分の存在をOKとするBeingの視点と他者から評価される自らのDoingをバランスよく適度に育てていくのが良いということ



ことがわかりました。そのために子どもの存在を尊重することを中心として、プラス思考のフィードバックをしていくことが大切であるということ、カウンセリングの知識をベースにお話されました。具体的な場面での活動として、ワークを3つ行われました。①ありがとうカードの記入、②グループによるリフレーミング、③「私は私が好きです。なぜならば～」です。どれもすぐ現場で使える実践的なものであり、児童生徒へ対応する際の技法として大変有効であると思いました。どの先生方も、熱心に参加され、和気あいあいとした雰囲気の中にも熱気を感じた1日でした。

（文責：吉川 修司）

○ 特集「第35回日本学校教育相談学会総会・研究大会（新潟大会）」レポート

・実践事例研究発表に参加して

心に残った発表を紹介합니다。一つ目は「ギフテッド生徒への対応」です。ギフテッドとは、平均より著しい知能や能力を有する子供のことをさしています。知能が高く理解力がありますが、行動面では色々な問題を起こすことがあります。これも特別支援教育の範疇に入ります。

二つ目は、「解離症状を呈する大学生に対する支援プロセスの事例」です。解離症状を呈する子供はそれほど多くないので、実際にそのような場面に遭遇したらこちらがパニックに陥ってしまうと思われます。この発表では解離症状を起こしたときの心理状態をグラフ化しました。症状が発症するのは、ストレスが極限の時だそうです。その時にカウンセラーなどに話すすと緊張が解けるそうです。カウンセリングが有効だと思ひました。解離はストレスに対する防衛機制です。

(文責：小川 正人)

・自主シンポジウムに参加して

自主シンポジウム1「生徒指導提要在新しくなつた今、学校現場に必要な学校教育相談とは」

企画者・司会者・話題提供者：木村正男（可児市立土田小学校長、学会事務局長）

指定討論者：藤原忠雄（兵庫教育大学大学院）

話題提供者：金子恵美子（慶應義塾大学教職課程センター）

高田清美（元総社市福祉課）

藤坂雄一（石巻市立大谷地小学校教務主任）

本自主シンポジウムは、企画者が本学会の木村事務局長で、春日井会長、藤井副会長をはじめ、複数の役員を含む38名が参加するという熱を帯びたシンポジウムになりました。

ご存じの方も多いと思ひますが、「生徒指導提要」が昨年末12年ぶりに改訂され、子供の権利をより重視し、児童・生徒を主体に支える生徒指導への転換が図られました。教育相談が重要な役割を担い、生徒指導と一体化となった取り組みが求められています。2軸3類4層の生徒指導の構造が明らかにされ、すべての児童・生徒を対象としたプロアクティブな発達支持的生徒指導を土台に、新たな職「教育相談コーディネーター」を中心としたチーム学校の体制整備も求められています。

話題提供者からは、こうした「改訂生徒指導提要」のポイントをもとに、教員養成、福祉、学校現場（教室）、小学校管理職、それぞれの立場から学校教育相談の機能や重要性が報告されました。フロアからは、新たな生徒指導提要在機能していく職場風土の醸成、核となる教育相談コーディネーターの設置・育成、管理職の研修・理解・会得の必要性などの課題が出されました。

指定討論者からは、学校教育相談の意義・定義を改めて示すことが本学会の使命であり、そのための活発な議論が必要であることが提唱されました。2006年の学会ハンドブックの定義、大野精一先生による定義（2013年）を例に、生徒指導の一部の機能として埋没させず、1つの分野として、その重要性、実践・研究・研修の必要性を高めるため、改訂生徒指導提要の下での定義化が極めて重要であるとのことです。一実践者である報告者としては、生徒指導提要在を活かし、機能させた学校の教育相談の充実、そのための啓発・校内研修の方が課題ではと思ひますが、この分野の学問、学会を牽引するような立場の方からすると、きちんと定義化することが重要とのことです。春日井会長からも、生徒指導の質的転換に伴う教育相談の質的転換が求められているから、学校教育相談の再定義が必要という発言がありました。そのためにも、総会で報告があつた2024年末に学会として発行予定の『学校教育相談—理論と実践のガイドブック—』で、再度定義化を進めるとのことです。

なお、企画者である木村氏いわく、「学校現場に必要な学校教育相談とは」をテーマとした自主シンポジウムは、次年度以降も継続するとのことです。

(文責：松本 直美)

○ 「第24回夏季ワークショップ」レポート

Bコース「アドラー心理学による学校コンサルテーション」 講師：浅井健史（明治大学）氏

Bコース「アドラー心理学による学校コンサルテーション」は、アドラー心理学の理論と技法を用いた学校コンサルテーション（アドレリアン・コンサルテーション）の実践方法について、①アドラー心理学が目指すもの ②コンサルテーションの意義 ③アドレリアン・コンサルテーションのステップ ④コンサルテーションの事例 ⑤グルー

プ・ディスカッションの5項立てでワークショップが行われました。講師は明治大学兼任講師の浅井健史先生でした。前半の講義の中心は③で、ステップ0の「環境整備」から「関係づくり」「アセスメント」「目標開示(仮説提示)」「再方向づけ」「フォローアップ」の5段階それぞれに関して、ポイントや留意点など詳細な説明がありました。どれもこれも重要な内容ばかりでしたが、その一端をご紹介します。

- ・「相手の目を見て、相手の耳で聴き、相手の心で感じる」非審判的かつ共感的姿勢は、それだけで勇気づけとなる。
- ・現場では「誰の」「どんな」ニーズに応えるか錯綜しやすいので、主観的、客観的な枠組みでアセスメントする。
- ・目標開示(仮説提示)では、断定的な言い方は避け「どう思うか」問い、異論を述べられるようにする。
- ・1回に1つの代替案。無理なく実行できる行動レベルで。代替案作りは共同作業の方が実行への動機づけが高まる。
- ・「こんな対応を先生のレポトリーに加えてみませんか」という表現だと心理的抵抗を生じさせにくい。
- ・代替案を実行しなかったり良い結果になっていなかったりする状況を遠慮無く報告できる関係をつくる。

後半は、小グループによる話し合いの後に各グループの発表と質疑が行われ、それぞれの質問に対して丁寧に回答してくださったので、前半の講話をより具体的に現場に沿った形で理解を深めることができました。

なお、是非読んでほしい本として『学校コンサルテーションのすすめ方』『コンサルテーションとコラボレーション』の2冊の書籍の紹介がありました。(文責：築瀬のり子)

Cコース「発達に偏りのある子どもを持つ保護者への対応と支援」 講師：井瀧知美(大正大学)氏

発達に偏りのある子どもを持つ保護者にどう対応して支援していくのかについての講話と演習でした。まず、発達についての説明がありました。「種の中にいろいろな物が内包されており、それらは環境によって開いていく。自分に合った土壌で育っていけばよい。」「発達に偏りがあるということは、発達障害とイコールではなく、大多数と異なる現れ方、異なる道筋をとって発達することを指し、神経学的多様性の表れの一つ。」「障害があるということは、日常生活において適応に困難を抱えている状態を指す。」「不適応、過剰適応、真の適応について。」など、わかりやすい説明がありました。その後、発達障害の中でも自閉症スペクトラム障害(ASD)を中心に対応の仕方等について話がありました。いくつか印象に残ったことを羅列します。「ASDは違っているけど欠損ではない。情報処理が独特。」「大人の自閉症の治療は、ほとんどが二次障害の治療をしている。」「自閉症は、思春期が越えられない問題。」「保護者と教員が子供の状態像について、共有できている時は上手くいく。」「困った子ではなく、困っている子と考える。」「定型発達の子は、自然にプラスの循環になることが多いが、育てにくい子は、マイナスの循環になりがち。」「100%待つとほめはぐってしまうので、25%でほめる。皮肉や余計なことは言わない。シンプルに褒める。」「思春期はいらだたせることをわざととするが、それは自立の準備。」「自閉症には叱らない子育てをしよう。叱られたことを忘れない、叩かれたことも忘れない。」等々。井瀧先生の豊富な臨床から出た言葉には、ハッとさせられることばかりで、何かという時にふと蘇ってきます。

(文責：伊澤 裕)

Fコース「子どもの理解と支援に活かすアタッチメント」 講師：工藤晋平(名古屋大学)氏

Fコース「子どもの理解と支援に活かすアタッチメント」は、名古屋大学心理療法室の工藤晋平先生が講師を務められました。講義は『①アタッチメントの基礎』『②概念の整理』『③アタッチメントと行動の問題』『④理解の焦点』『⑤学校における支援の視点』という流れで進められました。先生が強調されておられたのは、「アタッチメントの質が安心感のあるものかどうかが大切」ということでした。危機的状況で助けを求め、助けてもらったときに落ち着くかどうかで、その「質」が確かなものかどうか判るといえるものです。また、乳児期のアタッチメントが不変という訳ではなく、環境の変化に応じてアタッチメントは変わるということも強調されていました。乳幼児期にとどまらず、学童の年齢であっても、親や教師が不適切な関わりをすればアタッチメントのトラウマとなることもあり得るといえる先生の言葉は、ワークショップ参加者の心を揺さぶる問題提起であったように思われました。

『学校における支援の視点』から、「安心感に基づく学級経営」についてをご紹介します。

<安心感に基づく学級経営>

- ・集団が安定していることで個別の対応を減らすことができる(不安や緊張の少ない集団)
- ・良いことと悪いことの境界線を明確にする(一貫性をもたせる、実効性をもたせる)
- ・やるべきこととそれに伴う苦痛に目を向ける(苦痛を気遣いケアする)
- ・秩序を維持し保護する「強くて賢い」役割の期待(大人によって集団が守られている安心感が大事)

ワークショップ参加者からは、たくさんの気づきや感想が寄せられましたが、中でも、アタッチメントの概念や学校環境におけるアタッチメントの仕組みについては、あらためて考えさせられた参加者が多かったようです。

(文責：佐藤 佳子)

○ 第41回支部研究発表会

発表者 伊澤 孝 氏 コメンテーター：藤浪 直紀 氏

第41回支部研究発表会が令和5年9月9日13:30より青少年センター第3研修室にて参加者12名で行われました。発表者は伊澤孝先生で、コメンテーターは藤浪直紀先生でした。困難を抱える子どもへの有効なアプローチとは何かを事例を通して考察しました。小学校低学年でのQIの結果の読み方について、低学年では子ども同士の関係よりも先生との関わりが強く出ること、先生を介して児童同士の横関係をどう築いていくかなどのポイントが明らかになりました。また、発表者の児童の得意分野へのアプローチ、一人一人を大切にしていく姿勢が困難の解決に有効だったとのアドバイスが有りました。児童生徒が学校でいきいきできる様に、笑顔になれるポイントやエッセンスがわかる研究発表会だったと思います。



(文責 吉川修司)

○ 栃木県支部事務局からのお知らせ

今年度後半の事業計画についてお知らせします。今年度は全ての講座、研修会を対面形式としました。11月の支部研究発表会の発表者を募集しています。

(1) 令和5年度事業計画(後期分)

ニュースレター No.40 発行予定

(2) 令和5年度より、学会本部からの直接メール配信サービスが開始されています。

つきましては、メールアドレスの登録をお願いします。

開催期日	事業名	会場	備考
10月14日(土) 13:30~16:00	【第15回 とちぎ教育相談カフェ】 「子どもの言い分どうきくの？」 馬場友治 氏 (相談学会スーパーバイザー)	青少年センター	参加費1,000円
11月11日(土) 9:00~12:00	【支部認定委員会】	青少年センター	
13:30~16:00	【第42回 支部研究発表会】 ※ コメンテーター：馬場友治 氏 (相談学会スーパーバイザー)	青少年センター	発表者を募集します
12月2日(土) 13:30~16:00	【カウンセリング特別講座Ⅰ】 演題「見えない心と想う心と」 講師：長久保勇輔 氏 (宇都宮カウンセリングオフィス、作新学院大学講師)	教育会館 大ホール	参加費無料
令和6年 1月21日(日)	【日本学校教育相談学会 第34回中央研修会】 後日、本部より詳細案内があります	オンライン予定	
2月3日(土) 13:30~16:00	【カウンセリング特別講座Ⅱ】 演題「性の多様性をめぐる学校教育の課題」 講師：渡辺大輔 氏 (埼玉大学准教授)	教育会館 大ホール	参加費無料
2月17日(土) 13:30~16:00	【冬季特別研修会】 仮題「医療から見た発達障害」～ 服薬の効果と課題 ～ 講師：杉田憲一 氏 (とちぎメディカルセンターしもつが 小児科医師)	青少年センター	参加費 会員：2,000円 一般：3,000円

(まだ、32%、124人中39人分しか集まっておりませんのでどうか宜しくお願い致します。)

方法：jasc.tochigi@gmail.com まで
登録したいメールアドレスと氏名をメールする

* 職場ではなく、ご自分のパソコンまたは携帯メールアドレスをご登録ください。

(3) 研究紀要(第18集)発行予定です。原稿を募集いたします。

締め切りは年内の予定です。奮ってご応募ください。様式は以下の形式で作成してください。ホームページからも形式をダウンロードできます。

紀要原稿の形式

○○○タイトル (MS 明朝 12pt)
○○○サブタイトル (MS 明朝 12pt) *サブタイトルがある場合
○○○氏名 (所属) (MS 明朝 12pt) *事例の場合、所属で特定されないような配慮を

1 (本文) 2 3 字 2 段組 MS 明朝 10.5pt ○○○○○○ ○○○○○○○○注釈・付記・文献なども 2 段組に 2 3 字 MS 明朝 10.5pt

(4) 新会員勧誘のお願い

新規会員の勧誘をお願いいたします。入会希望者がいた場合、本人に事務局までメールを送っていただく。手続き関係書類は事務局から本人に送付いたします。

* 今年度から入会金 5000 円が無料になり、年会費 7000 円のみで入会できます。

日本学校教育相談学会栃木県支部

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館
栃木県連合教育会相談部内
日本学校教育相談学会栃木県支部事務局 吉川修司・佐藤佳子
TEL 028-627-5682 FAX 028-627-5682
E-Mail : jasc.tochigi@gmail.com
ホームページ : <http://t-soudan.sakura.ne.jp/index.html>
(会員の部屋パスワード tb-jascg3123)

発行責任者 柴 一彌
広報担当者 伊澤 裕・小川 正人・倉島 郁乃・佐藤 幹雄
馬場 友治・平峰 孝二・松本 直美